図書展示

「移」から考える

—ひとの移動で生まれるもの—

はじめに

ホモ・サピエンスが動物たちを洞窟に描いた先史時代から、グローバル化の進展で容易に国境を越えることが可能になった現在に至るまで、ひとが移動することで、膨大な思考の諸産物が生まれてきました。

今いる場から移った別の場において、ときにひとは、身につけてきた振る舞いが通用しないことがあります。それは、自らの常識を疑い、自身の変化を生む契機となり得ます。また同時に、移った場やひとたちへも少なからず影響を与えることがあるでしょう。

本展示では、そうしたひとの「移」の作用がもたらす諸相を、複数の切り口から考えます。

第1章では、個人が異文化・異民族・異宗教といった「異なる場」と出会う「旅」から生まれた作品の数々を紹介します。

続く第2章では、日常から離れ聖地を巡り歩く信仰の旅、「巡礼」を取り上げます。連綿と幾重にも引き継がれてきた巡礼の、時代や場所を越えて変わらぬエッセンスと、変わりゆく巡礼の様相が浮かび上がります。

そして第3章では、本展示における「移」の作用の着地点として、場をつくることについて、様々な側面からのアプローチを試みます。

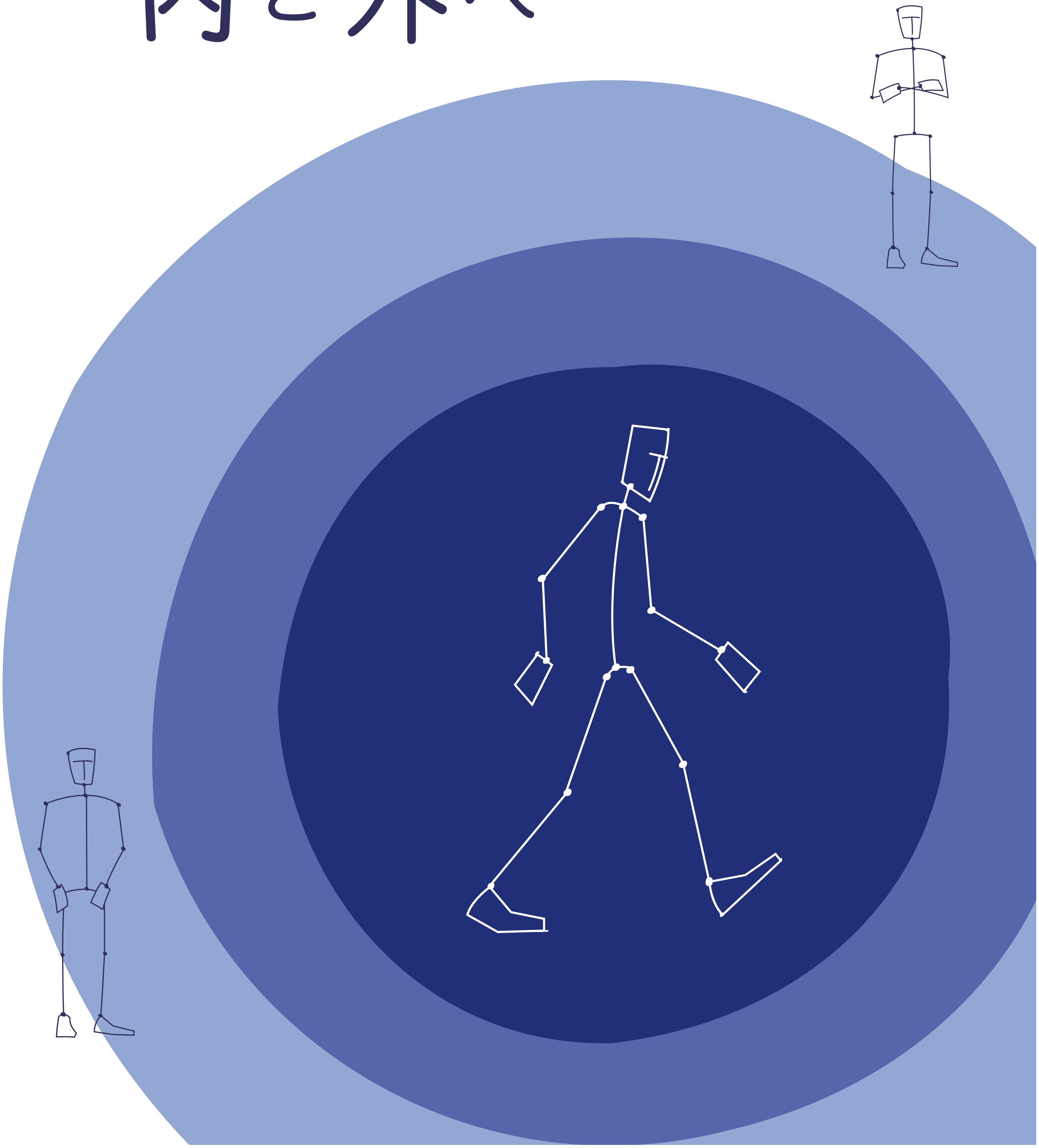
手にした1冊から、あなたの「移」がはじまる。
そんな展開になることを期待しています。

2017年7月29日
奈良県立図書情報館

個の旅

第1章

―内と外へ―



第１章では、ひとの「旅」から生まれた作品群を取り上げます。

いま暮らす場所から離れて別の場所へ行くことを、わたしたちは「旅」と呼びます。旅の過程では、訪れた先で暮らす人たちと出会い、土地の食をいただき、景色や匂いを感じます。

それらの印象は断片的であり、観察者の偏見や先入観に縛られたいびつなものにもなりますが、その土地のリアルな手触りと時間は、旅をしたひとしか得られない、そしてそのひとの仕方でしか感じられない独特なものです。

この章では、旅をすることでひとが得た何かが形となった作品を、時代やジャンル、場所を越えて並べました。

多くの作品に通底するのは、その「旅」が、思いを巡らすものであること、訪れた場所に呼応して、或いは反発して、ひとの振る舞いや内面的な考えが変化する「旅」であることかもしれません。旅は、意識していなかった自分の属性や常識が揺さぶられ、自らと周囲を考えることにもなるのです。

別の側面から見ると、旅するひとは元々の共同体から離れ、一時的にどこにも属さない宙に浮いた状態に置かれます。それは、移動した土地に同化できない中途半端で不安定な状態である一方、その土地の常識にとらわれず、清新な感性で物事を捉え直すことになります。故郷を離れた後、何らかの理由で再びそこへ戻る場合も、ここでは「旅」と呼びます。

なにはともあれ、様々な「旅」のかたち、「旅」から生まれた作品を、手に取って思い思いに感じていただければと思います。

歩くということ

宮本 常一
(1907 – 1981)

ノンフィクション作家佐野眞一の評伝『旅する巨人』(文芸春秋, １９９６)で描かれる宮本常一は、生涯に約１６万キロ、地球約４周分を歩いた民俗学者です。出生は山口県周防大島。民俗的な題材を多く残す地で幼少期を過ごし、旅の人生の出発点となった地でもあります。
宮本は写真という媒体を使い、撮りためた枚数は約１０万枚、克明で膨大な民俗調査の記録と共にその土地の景色や人々の営みを映し出しています。
氏は卓越した聞き取りによって、その地に生きる人の想いや息吹までも吸い上げて記録に留め続けました。まさに歩く人ならではの体験に裏打ちされた賜物でしょう。また、それまであまり振り向かれなかった老人や女性・子供を対象にとらえ、定住民だけでなく、移動する人々も視野に入れた調査姿勢や、日本列島の中で東日本と西日本の違いに関心を示したことなど、その後の民俗学の研究発展に大きな足跡を残した人物の一人でもあります。
ちなみに略年譜などをみると、戦前の一時期奈良の旧制郡山中学校の教壇に立った時期があり、都祁や吉野地方の民俗調査にも従事します。旅する巨人は、少なからず奈良にもその足跡を残しています。

歩くということ

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー
(Henry David Thoreau, 1817- 1862)

ソローは、アメリカ東部マサチューセッツ州のコンコードで生まれました。ウォールデン湖畔に小屋を建てて自給自足の生活を行った記録『森の生活』は、よく知られています。ただしソローは、社会から目を背けた隠遁者では決してなく、当時の奴隷制や戦争に反対して納税を拒み、黒人奴隷の逃亡を世話するなど、社会改革家の一面も持っていました。

敬愛する友はいたものの、本当の意味で「孤独」でいることを手放さなかったソロー。ソローを何か一つの言葉で形容するとしたら、「歩くひと」ではないかと思います。

遺稿となった『歩く』(山口晃編訳 ポプラ社, 2013, 原題 “Walking”)によれば、ソローはコンコードの森を毎日4時間以上歩いていたようです。木々や植物、鳥や虫たちを観察し残した文字とスケッチ、日々の記録は、膨大な量にのぼります。遠方へ旅することもありましたが、ソローの生活と思索の源泉であり足場は、日々の森の逍遥でした。同じ場所であっても、日々歩く毎に、新たな兆候を目にし、書き留めました。ソローの残した記録を読み進めると、彼が希求した、手つかずの「野性」の知性から学ぶということの壮大さに詠嘆すると共に、文明社会において実践することの様々な困難さを思います。

『歩く』において、「さすらう “sauntering”」の語源は「聖地へ “à la Sainte Terre」が有望であると書き、また、「歩く人」は「教会、国家、人民の外にいる、いわば第四の身分」とするなど、ソローにとって歩くことは、文明や権力、市民社会の影響が及ばない行為だったのではないかと想像します。

いまにつながる多くの種をはらむソローの思想に、あなたもふれてみてください。そしてできれば、仕事や雑事へ捕らわれた気持ちをひとまず置いて、たとえば早朝や夕暮れの佐保川沿いの道を、ソローのように「歩いて」みてください。

【番外編】

「無縁」という場所

「無縁」とは、歴史学者、網野善彦が提唱した言葉で、世俗の私的な支配に拘束されない状態にある人や場所を意味する概念です。網野によれば、「無縁」は中世において世俗権力の私的支配下にない自由を意味するものであり、道路や市場、河原などの場所や、遍歴の職人や芸能民など農業に携わらない職種の人々が、「無縁」の性格を持っていました。

例えば河原は、古来、あの世とこの世の境であると考えられており、神仏の領域に近い場所であることから、世俗の権力が及ばない「無縁」とされました。「無縁」である故に、領主の賦課する租税が免除され、通行の自由や平和領域であることの保証など、誰もが自由に活動しやすい場でもありました。

また、水運の利便性から河原には次第に市がたつようになり、品物の売買のために様々な人々が集まりました。人が集まるようになると、芸能の興行や勧進もおこなわれ、芸能民や聖なども集まるようになりました。

さらに、「無縁」には、障害をもった人々や何らかの理由で遍歴を余儀なくされた人々も集い、中世の市は有象無象とした様をみせたことでしょう。河原に出来た市は、大水で流されたり、戦火に焼けてしまったりしながらも、あらゆる人が集う都市へと発展していきました。

ひとやものが自由に行き交う「無縁」という場所。それは決してユートピア的な世界ではなく、正負や陰陽のエネルギーが混濁した場であったと考えられます。「無縁」は中世社会がもつ特徴の一つであり、現代社会には、この「無縁」はもはやありません。ここでは、網野善彦の著作と合わせて、中世ヨーロッパにおける「無縁」を取り上げた阿部勤也の著作も並べます。

参考文献

『河原にできた中世の町』網野善彦文 ; 司修絵　岩波書店, 1988

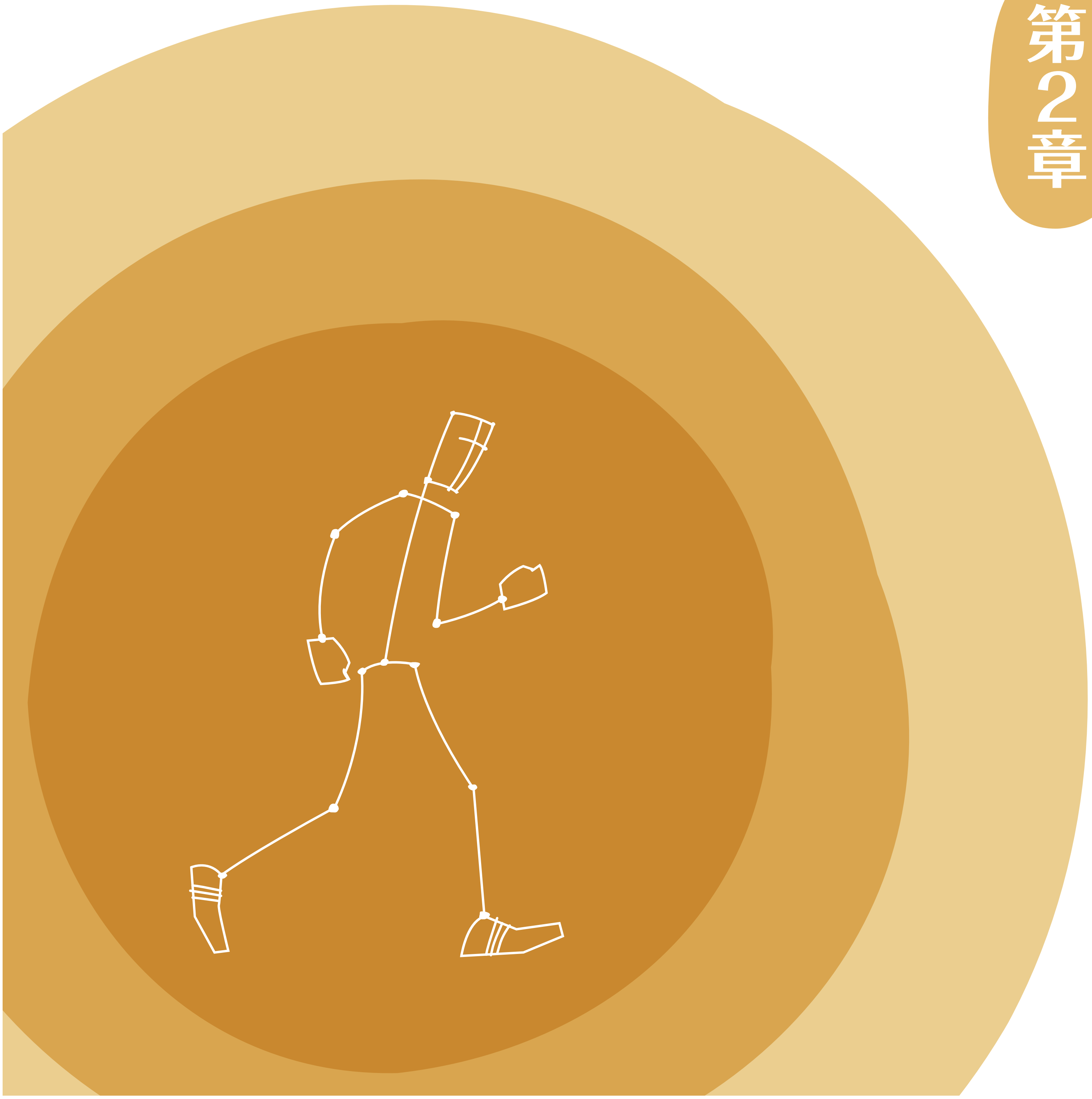
『無縁・公界・楽』網野善彦著作集第12　網野善彦著 岩波書店, 2007

国史大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>

信仰の旅

—巡礼—

第2章



第２章では、信仰の旅である「巡礼」に関する資料をご紹介します。

ひとが日常的な生活空間を一時的に離れて、宗教の聖地や聖域に参詣し、聖なるものにより接近しようとする宗教的行動、それを「巡礼」と呼びます。「巡礼」は世界各地のあらゆる宗教に時代を越えて行われている行為です。例えば、キリスト教ではエルサレム、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、バチカン市国が三大巡礼地とされており、イスラム教ではムハンマドの生地でありカアバ神殿のおかれるメッカが最大の聖地とされ、メッカへの巡礼は一生に一度は行わなければならない義務とされています。こうした宗教信者にとっての「巡礼」は信仰の証、あるいは信仰上の義務、そして救済や人生の苦しみからの脱却を願って行われます。「巡礼」はただ聖地への礼拝だけが目的ではなく、その移動も含めて全ての過程・時間が信仰の旅「巡礼」を形作る要素になります。こうしたひとの移動により、巡礼路には宿駅が発達し、交易が行われ、また文化の交流、コミュニティの形成などが起こりました。

日本では、四国の弘法大師ゆかりの寺院を巡る四国八十八箇所巡りのほか、お伊勢参りや熊野詣が有名な巡礼地ですが、「巡礼」のあり方は時代とともに変化してきました。江戸時代には五街道をはじめとする交通網が発達したことにより信仰に基づく「巡礼」から、次第に観光の目的も含むようになります。現代においても、もちろん信仰心や現世・来世利益を希求する巡礼者も多くいる一方、自分探しの「巡礼」、癒しとしての「巡礼」、趣味としての「巡礼」などその目的も多様化してきています。また礼拝地である「聖地」のあり方も過酷な修行場や聖なるものへの近接地ではなく、楽しみを提供する観光地のとしての様相を帯びてきています。

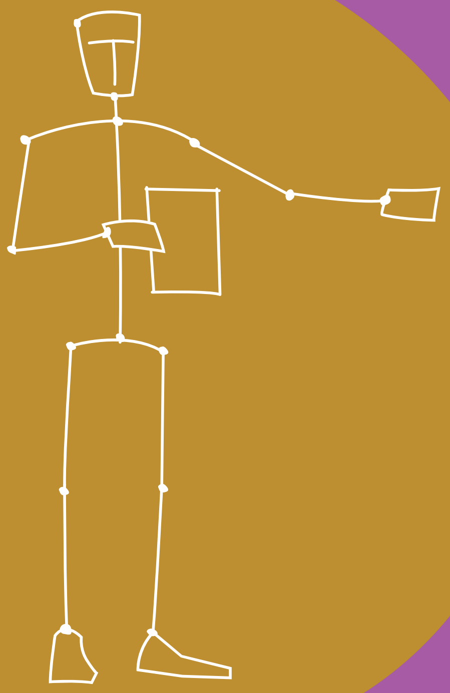
本章では宗教や信仰、地域や時代、それぞれに連綿と受け継がれるもの、また様変わりするもの、多様な「巡礼」の様相をお伝えします。まず地域や時代を問わず個人の人生に大きな影響をもたらしたであろう「巡礼」の記録（紀行・体験記・日記など）を並べています。ぜひ、資料を手に取り、巡礼者の生の声に触れてみてください。次に日本と世界の「巡礼」の歴史や文化に関連する資料、写真集などのヴィジュアル的な資料からさまざまな「巡礼」の有り様をご紹介します。日本の巡礼では、明和年間（1764～1771）に始まったと伝わる県下の「大和北部八十八ヶ所霊場」についても展示ケース内でも資料をご紹介していますので、あわせてご覧ください。

また、昨年12月には新語・流行語を決定する年末恒例の『2016 ユーキャン新語・流行語大賞』では「聖地巡礼」がランクインしました。「聖地巡礼」は本来の宗教上の聖地・霊場などを参拝して回ることとは別に、今やアニメや映画の舞台になった場所を「聖地」と称して訪れること指します。こうした「聖地巡礼」による経済効果は計り知れず、地域活性化の起爆剤ともなっています。先の「大和北部八十八ヶ所霊場」についても地域活性化の取り組みが始まっていますが、近年の御朱印ブームも観光の活性化に一役買っています。こうした近年の変わりゆく「巡礼」や「聖地」に関連する資料もご紹介します。

第3章

場をつくる

―自分を開く・拓く―



第1章・第2章では、多様な「旅」を取り上げてきました。旅が移動の「過程」だとすれば、最後の第３章では、その「着地」の状態ともいえる「場をつくる」ことへと展開します。

地方や海外へ「移住」してそこで新たな暮らしや仕事を始めることや、街の市民活動や憩いのための場をつくることなど、地方・都市にかかわらず、場づくりに携わるひと・事例を中心に、広い視点で関連する資料を取り上げます。一般社会で重視される効率性や数値の評価とは一線を置き、ひとを中心に考えた場づくり、全国各地で活発なアートプロジェクトを通したアートと地域コミュニティ、障害者や高齢者のケアとアート、ケアと地域コミュニティといった関係性にも注目します。

また、場の運営や場における集合知を生み出す方法論、一つの仕事・肩書きに縛られない働き方やふるまい方なども紹介します。

なお、ここで示す「場」には、家でも職場でもない第三の場所「サードプレイス」が含まれています。アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが、「インフォーマルな公共の集いの場」として社会的な価値と効用を指摘したサードプレイスは、かつてのフランスのカフェのように、誰でも自由に来て会話して帰れる「とびきり居心地よい場所」で、訪れたひとが社会の属性や役割から離れて振る舞える中立の領域とされます。

このサードプレイスは、地域の資源保全やコミュニティ創造の観点から議論される「コモンズ」の考えとも重なります。コモンズは、一般的に、共有・共用する資源、またはその共同管理・利用制度を指す概念で、日本では入会地の問題が主に取り上げられてきました。社会における「公的領域」「私的領域」の中間に位置する「共的領域」とされるコモンズ。三者は互いに入り組んでいますが、明治の近代化以降、「公」と「私」が拡大し「共」を浸食していきました。要因は他にもあると考えられますが、かつての入会地やサードプレイスは現在、失われつつあります。

一方で、その形をしなやかに変えて、コモンズやサードプレイス的な場や考え方が、いま日本各地で生まれているように思います。場のあり方は多種多様であり（それはひとや土地が異なることを考えれば当たり前のことです）、そのモデルを取り出して真似できるものでは決してありません。

ただ、移るひと、移る先のひと、という「ひと」に注目してあえて共通項を探すとすれば、どちらも「寛容である」ということはいえるかもしれません。言い換えると、それは自分を外に開くイメージであり、（新たな領域に自分を開拓していく意味で）拓くことではないかと思います。

参考文献

レイ・オルデンバーグ著『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房, 2013
三俣学, 森元早苗, 室田武編『コモンズ研究のフロンティア：山野海川の共的世界』東京大学出版会, 2008
細野助博, 風見正三, 保井美樹編『新コモンズ論：幸せなコミュニティをつくる八つの実践』 中央大学出版部, 2016